

- ・タイトル：多職種で考える！患者さんに伝わる伝え方～ヘルスコミュニケーション～
- ・日時：5 月 13 日（土）16:45 -18:15 第 8 回プライマリ・ケア学会総会
- ・場所：サンポートホール高松
- ・参加者：医学生、医師、薬剤師、コメディカル 54 名
- ・講師：JCHO 本部顧問 徳田安春 先生
綾川町国民健康保険綾上診療所長 十枝めぐみ先生
もも調剤薬局 末長泰則 先生

「医療者と患者の間のコミュニケーションギャップは何故おこってしまうのか」このセミナーでは、風邪診療と糖尿病の診療を例にとり、医療におけるコミュニケーションの重要性を多職種で学びました。54 名の参加者は医師だけでなく、看護師、栄養士、助産師、医学生と様々で、当日の見学者 20 名が加わり会場は熱気いっぱいとなりました。

風邪診療のグループワークでは、「風邪に抗生剤は不要です」というメッセージを、どうやって患者に伝えるかをポスターを作成しながら考えました。「集団へのメッセージの届け方」をレクチャーで学び、厚生労働省の抗微生物薬適正使用の手引き 第一版を参考にしながら、思い思いのポスターを作成しました。

糖尿病のワークでは、糖尿病患者への病状説明と治療方針の決定について二人一組でロールプレイングを行いました。シェアードディシジョンメイキングの評価表を用いてお互いのフィードバックを行い、患者と医師が情報を共有しながら治療方針を話し合う過程を学びました。

ミニレクチャーでは、「病院の言葉を分かりやすくする提案(国立国語研究所)」を紹介し、医学用語や専門用語がコミュニケーションの障害になっていること、言葉で説明するだけでなく、紙に書いて渡したり、患者自身にメモを取ってもらうことが、正確な理解やその後の記憶維持に重要な事、ティーチバック (teach back) 法で患者の理解を確認する方法を学びました。

最後に、参加者が作成した 50 個近い風邪ポスターの中から優秀賞を選び、どの点が優れていたかを会場と共有しました。

徳田安春先生、十枝めぐみ先生、末長泰則先生より、臨床現場でのコミュニケーションの重要性についてお話を頂き、これからの日本では人工知能や ICT が普及するため、医療者のコミュニケーション能力はさらに重要性が高まるとコメントを頂きました。

JDN ではこれからも、若手医師に必要な学びを提供する活動を続けていきたいと考えております。皆さまのご支援とご助言をよろしくお願いいたします。

・当日の写真

